



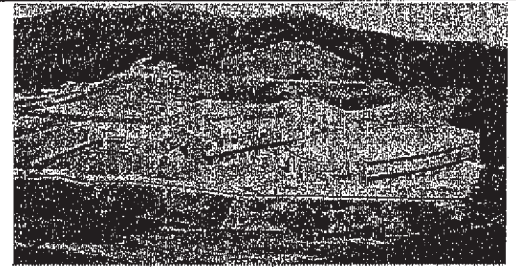
ふる里学園・和田浦 〒290-2725 安房郡和田町黒崎 1190-1
tel 0470-40-7227 mail fgakusya-wada@blue.ocn.ne.jp

佑 啓

社会福祉法人 佑啓会

http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya

発行者 里見 吉英 編集者 三枝 金利



ふる里学園 〒290-0265 市原市今富 1110-1
tel 0436-36-7611 mail fgakusya@peach.ocn.ne.jp

「来し方」そして

三股 金利

「私は今日まで生きてきました。時には誰かの力を借りて、時には誰かに裏切られて」こんな吉田拓郎の歌がありました。高校時代のことです。夏の甲子園地方大会の記事を見ながらふと思い出してしまいました。いつの間にかそこから三十年が過ぎようとしています。

私の父親は三十三歳で病死しておりますので、その年を越えるまではなんとなく長く感じておりました。しかし、その年齢を越えてみるとあつという間でした。そしてもう、五十に手が届きそうなのです。いつまでも若いつもりで、職員とスポーツに興じたり、あるいはカラオケにいつても冷めた自分に出会うことが多くなりました。周りとは無関係に自分の中から染みてくるような感慨。高齢社会に「その年でなにを言っているのか」と叱責されかねませんが、老いの自覚というものが出てきたような気がします。無理をしないための、生理的な制御なのかもしれません。

えは拓郎は「祭りのあとの寂しさは・・・」そんな歌も歌っておりまして。和田町での生活を始めて四ヶ月。高齢化率県下の土地でおばあさんやおじいさんの側く姿に影響されていることもあるでしょう。山里と海、去来する小さい頃の風景や遊びの断片。あの腰の曲がったおばあさんは、どんな人生を歩んできたのだらう。花嫁街道を馬で嫁ぎ・・・網の手入れをする古老は、過去の大漁をまた夢見ているのでは・・・。「白鯨」(和田は鯨の町なのです)「老人と海」勝手なストーリーを想像させてしまう鬱陶気があるので。虚構よりも重い人生があつたかもしれません。



福祉の構造改革。対等の理念やそれに基づく契約がその手段に思われがちですが、それとて完全ではありません。思いやる気持ち。それが根源のような気がします。契約は、なんとなく冷たさをも感じさせるようなイメージを持っています。もしかしたら約束事を守ってくれないかもしれない。お互いをけん制する関係。ネガティブに考えすぎなのではないか。対等という言葉にも釈然としない部分が残ります。その意味するところ、フイーリングではわかつたような気がするのですが、障害ゆえのハンディが、差別を生んだことは事実です。我々のような環境にある者として反省すべきところも多くあります。その反省に立つての改革という点に何の異論もありません。

言葉の力は確かに大きなものがあります。変化の兆しに大きな影響を与えていることも事実です。それでも考え込んでしまします。「私と対等な人は誰なのか」「生まれも育ちも環境も、すべてまったく同じという人はこの世に存在しません。会う人毎に年齢も考えも異なります。そのたびに反応するスイッチを切り替えているのです。そして共感したり、批判したり、時には感動することもある。ここである対等は、そんなことを意味しているのではないと言われそうですが、対等でない関係にこそ、人間関係の奥の深さがあると思っているのです。親子・隣人・師弟どんな関係も対等の意識から始まる付き合いはありませぬ。親子とて破綻することはありますが、原因は対等でなかったからというわけではないはず。数いや思いやりの欠如もあるでしょう。以前、小学生が校長先生に謝罪をさせたという記事を読んだ時、人間関係がママゴトになってきたような印象を受けました。

平和でボケているのか、平和の中で育った私にはわかりません。みんな平等で暮らしてこそ、でも子供から大人まで人間関係の希薄さを感じているのは私ひとりなのではないでしょうか。深みにはまらない、苦しさも感じない、距離をおいての付き合い。言い換えれば面倒臭くなく日々が送れば・・・。

都会の人が田舎に転居すると近所づきあいが面倒で、なんて話がよくありました。最近では田舎暮らしを求める人が増えているのか、その手の雑誌を見かけることが多くなりました。自然のなかで生活したい、人との関係で物足りなさを感じている人が多くなってきたのかもしれない。

人は生活様式の変化でがらりと変わる部分と変えられない部分を持っています。過去はもちろん変えられませんが、過ぎ去った時間にどんな意味があつたのか、それは今の生活自体と密接に関係していると思います。苦しいことがあつたら今があると思うことなどその例でしょう。人それぞれに「来し方」があり、そして「行く来」があります。

私のことをわかつて欲しいという誰しもの欲求、そこに人間関係の糸口があるような気がします。

政治も経済もそしてこの世界も改革の連呼です。複雑な様相を呈していますが、大切なものは何か、それを見失わないようにしたいと思っています。

台風7号が過ぎ、きらくく波間にはサーファーがウミネコのように浮いています。日がな一日、あおして揺られていたいと思うことがあります。「人間関係、正直疲れまんねん」これからが正念場ですがついていけるか心配です。変われないのは歳を重ねたせい、と言いつつも準備して

私は思っています。明日からもうこうして生きていくだろうとくく(吉田拓郎 今日までそして明日からより)

(和田浦 施設長)

縁

館野一男

ふる里学会和田浦のデイルームからは、正面に丸山町のローズマリー公園前の海岸線と太平洋が眺められます。里見理事長、三股施設長ご自慢の風景です。

和田浦のオープンと同時に入所が叶った友彦は、この見える海岸線の少し先、千倉町の忽戸海岸に毎年夏になると一週間程滞在して浜辺の生活を楽しんでおります。小学生の頃からです。二十五年以上になります。

千倉では、目の前の海でゆつくりと水浴びをしたり、二階の窓に腰掛けて網干し場で作業する漁師さんを見たり、果てしなく広がる海をあきもせず眺めて過ごしてきたので、房州の風土になじんでいるようです。

従って和田浦に入所しても、まるつきり違う場所に来たという感覚はないようです。私達夫婦にとっても違和感はありませんでした。「縁」というのは不思議なものです。

友彦が養護学校高等部を卒業した時、その後の進路として袖ヶ浦福祉センターの入所を希望しましたが、当時自閉症の入所は無理だというのが方針だったそう措置される見通しはありませんでした。これは後日聞いた話ですが、その時一部の職員の方達が自閉症も受け入れてみよう、やってみようという意見をまとめた方にお話をした結果、入所が決まったようです。大学で心理学を専攻し、自閉症につ

いても研究したことがある里見理事長はこのメンバーの一人であり、入所後も常に見守っていただきました。この他にも三股施設長をはじめ県福祉センターでの経験を活かし新しい施設づくりの中核として意欲的に取り組んでいる職員は、十六年に及ぶ友彦のセンター生活を直接、間接にお世話いただいた方々です。で晴らしい環境と思います。人の「縁」です。

和田浦の職員は、この他に市原のふる里学会から移った人、新しく採用された人等で構成されていますが、入所者と目標を同じくした言葉遣いで話していること、対応のはいいことにはびつくりすることばかりです。そこそ親は一度も嫌な思いをしたことがありません。きつと入所者にも良い影響を与えることでしょう。

和田浦は、入所者全員が個室という日本国内では恐らく初めての施設だと思えます。集団生活も大事だけれど、安心して一人になれる居室を与えてやりたい。これは特に自閉という障害からして長い間の強い願望でした。

望んではいても、実際には遠い先のことだろうと思っていたのが実現しました。

「入所者は、障害の程度や生活能力が違うので個室の良さを活かして、それぞれの生活を考えよう」と、指導員が話しておられました。素晴らしいことです。親としてもできるだけのことをしたいと思っています。

私は古希を過ぎ家内も間近、残された時はそう長くはないでしょうが、ふる里学会と共によりよい生活基盤を

作っていくつもりです。

来年度から契約制度に変わるとか、未だその全容もはっきりせず不安な面もありますが、施設側と共に考え、協同意識をもつて進めてゆけば、必ずよい未来が開けるものと信じています。

それには地元の方々の御協力が欠かせません。「地元との話し合いで嫌な思いをしたことは一度もない、工事の砂ぼこりにもじつと耐えて下さった」と伺いました。このような近隣の方々の御好意を今後もいただきながら、ふる里学会は地域の中に溶け込んでいくことが大切です。

(館野友彦の父)

びわマラソン

大和田 美之



我がふる里学会では、この春から職員の間で二つのクラブが誕生した。一つは、以前からコーチをつけて厳しい練習を積んでいるバレー部である。もう一つは、元平成国際大学のエースであり箱根駅伝経験者のイトウ君を中心に集められた陸上部である。私はその陸上部に所属している。陸上部に入

部した目的は、走ることが好き、健康のため、ダイエットのため・・・と人それぞれである。先日、和田浦から、約三十分程の場所にある富浦にて、「びわマラソン」富浦さざ波大会が行なわれた。陸上部にとって初めての大会であり、イトウ君を盛り上げるために、法人内から陸上部所属の者・利用者・陸上経験者などを含め計十二名が参加することとなった。

大会当日、雨天が予想されていたが、曇り空。走る者にとっては、暑くもなかなかなかのコンディション。和田浦からは応援の寮生さんまで駆けつけ総勢二十名の大部隊、応援にきてくれた寮生さんのためにも練習の成果を見せてやると意気込む。(実際には週一回程度百m程の坂道を二・三度走るくらい)最初に五キロの部がスタートし、次に十キロの部、スタートが近づくとつれなげに緊張する。

いよいよスタートである。スタートの号令とともに一斉に走り出す。一キロ・二キロまだ余裕である。しかし、走り出した直後から背空が見え隠れし、とにかく暑い。中盤に差し掛かった頃には、何も考えられずバテバテ。追い打ちをかけるかのように目前には、信じられないような上り坂、何とか登りきり(歩いた)ゴールを目指す。下り坂を勢いよく駆け下り数名のランナーを華麗にかわすところまでは良かったが、その後は・・・

散々であった。寮生さんには、「充電切れ・充電切れ・早く走れ」と、野次を飛ばされ、係員にはリタイヤを薦められ、ギャラリにまで笑われる始末。

「ありえない・こんなはずじゃない」と自問自答し、なんとか完走したものの、結果は百二十八人中百十三位、法人内では最下位。こうして、通称びわマラソンは幕を閉じた。(参考までにイトウ君は五位・利用者のHさんは六十二位という好成績を残した)

走り終え、強面主任の言葉が頭に浮かぶ、「マラソンは自分との戦い。」この結果は、自分の甘さを知るよい機会となると共に、次こそはとりベンジを誓った。余談ではあるが、マラソン終了後ふる里学会・和田浦にて慰労会が行なわれたが、応援の寮生さん、理事長に罵声を浴びせられたことはいうまでもない・・・

(指導員)



編集後記

和田浦から望む太平洋。『夏』海と空の澄みきった青さ。そして皆で植えた芝生の青さ。目にも体にも心にも優しさを感じさせてくれるこの環境。

四季折々の風景を楽しみにしつつ・・・佐啓を送ります。

能重 光世